一般研究 研究報告書

研究課題二年度研究報告

宗湛日記にみる茶の湯の空間と所作の総合研究

(公財) 文化財建造物保存技術協会 顧問

伊藤 延男 研究代表

昨年提出した中間報告と重複する部分もあるが、逆に前回の報告以後微調整を行った所もあるので、 研究の概要を総括的に報告することとする。 二箇年に亘り三徳庵の助成を受けた宗湛日記の研究の最終報告である。

こととなった。そのため必然的に、宗湛日記に記述されている内容から導き出される諸問題の研究、 までは考えてもいなかった史料の選択や、 その結果、思いもよらぬほど多数の古写本(コピー)を入手することができた。しかし反面、これ 研究を行う必要を感ずるようになった。そこへ今回の助成を受ける幸運に恵まれたわけであるが、 ている。そこでは、茶道古典全集第六巻所収の『宗湛日記』(活字本)をテキストとして読み進め 一方、その頃から会員に入れ替わりがあって現在の五名が固定し、史料博捜が可能な態勢となった。 てきたのであるが、なかに理解が困難な部分が見出され、もっと多くの史料を収集し、広範な比較 本研究は、およそ十年前から有志が任意に集まって開いてきた「宗湛日記を読む会」から出発し 進行がやや鈍化する結果となった。 文献批判等、 いわゆる書誌学的研究から始めねばならぬ

ととした。但しこの中には、まだ会員全体の同意に至っていない事項も含まれているので、主となっ 記を読んで得られた多くの研究テーマのうちから主要なものを取り上げて研究の現状を報告するこ 体がどんな研究作業を行ってきたか、言うなれば研究の業績報告を行い、続く第二部では、宗湛日 て研究を推進した会員の名を文末に記しておいた。 かかる実情を踏まえ、この報告書では、全体を二部に分けた。第一部では、この二年間に会員全

## 第一部 総論

には直接連絡してみたが、良い返事は得られなかった。 されている宗湛日記の古写本を求め、多くの回答を得、そのコピーを入手することもできた。しかし、 私的に所蔵されている物件については、全く手がかりが得られなかった。二、三の所有者 インターネットを駆使して全国の図書館や公文書館、或いは研究機関に所蔵

較的新しく、 収録期間の最も長いものにだけ、献立日記と見聞書が付属しているという事実も判明した。このよ 収集し得た史料は、その数こそ多数であったが、一見しただけでは、飛びぬけて史料価値の高いも ほとんどコピーであるという制約もあって、筆跡による判断もままならぬ状態であった。要するに、 年であり、続いては明和・安永など一八世紀後半であり、以後幕末から明治或いはそれ以降と、比 は原本に近いか、という詮索に第一の興味が行くのが常であろう。 うな観察を基に作成した一覧表が付表1である。 尾の年代が、天正末年、慶長四(又は五)年、あるいは慶長末年と様々であることが判明した。又、 のは見出せない状態であった。そこで、最初は捨てられていた史料も順次取り上げることとした。 いものを除外していた。 このように多数の史料が集積出来た場合、文献を扱う者としては、どれが原本であるか、もしく こうして収集できた史料を眺めてみると、記述の発端が天正十四年であることは共通するが、 かつそれらの年号がその史料の実年代を示しているかは定かでない。又、 しかし、宗湛日記の場合は、奥書に現われた年代が、古いものでも元禄三 今回も当初は、書写年代の新し 得た資料が

る亭主の所作を見たまま、聞いたまま克明に記録したものである。これまた広義の茶会記に入るべ

次に見聞書とは何かと云えば、これも宗湛が呼ばれた茶会に於け

連の

要するに宗湛日記は、

日記

献立日記、

見聞書の三部構成になるものであったので

録である。一方、献立日記は、その茶会の一部として振舞われた料理の記録であって、

日記本体と献立日記、見聞書との関係は次のように考えられた。そもそも、日記本体は、大部分宗

あるいは地元九州で招かれた茶会に於ける道具の有様、即ち飾付を記した記

記録として相応ずるわけである。

2

種の写本から百三十件近い見聞記録が発見されたのである。これは今回の研究の最も大きな収穫である。既に茶道古典全集本にも、その末尾に、九件の見聞書を掲載しているが、今回の調査で、二 あったといえる。

ところで多くの写本が如何なる経過を経て今日に伝えられたものか、写本の系統図ができないも あるいはせめてグループ分けでもできないか、猶調査すべきことは多い

彼の跋文に出てくる黒田藩重臣・郡氏の実在も判明した。しかし大坂の蒹葭堂や鴻池家或いはその 研究者がすでに幕末明治期にいたことが判明した。また、 その結果、博多の地方史家で宗湛日記が日記、献立日記、見聞書の三部構成であることを見抜いた 二、関連資料の調査 門弟については、残念ながら積極的な情報が得られなかった。 博多、名古屋、大阪その他を訪れて、各写本に関連する資料を求めた。 国会図書館本の筆者大橋遅松の伝記や、

省略されている部分があるが、それをト書として書き起してみたので、茶会を復原的に把握できる ようになった。これは後述する点前復元への一歩として、その意義を評価することができる。 道具が用いられたか等を、日別に、時刻を追って表示したものである。これによって、宗湛の動静、 で纏めた内容一覧表であった。これは各茶会が、誰の、どのような座敷で行われ、そこではどんな 一日の行動などを克明に知ることができるようになった。加えて、日記には、当然のこととして、 三、内容一覧表の作成 我々が最初に手掛けたのは、宗湛日記に現われる茶会の記録を時系列

不備が残っている。いずれ改訂して完全なものとしなければならない。 しかしこの表が作成された時期にはまだ見聞書が発見、評価されていなかったので、 収録内容に

意義あるものと信ぜられる。 の趣旨に従って、 採用するかを決めていった。その一部を付表2に示す。この作業にあたっては、研究会の最初から 膨大な量となったが、コンピューターを利用した編集により、全期間 (天正十四年~慶長十八年) いう態度で臨んだ。まことに地味な仕事で、現在なお進行中であるが、宗湛日記の徹底研究として に亘る表が実現の運びとなった。そこで、諸本から得られる異同を活字本に記入してゆき、どれを 四、日毎文献比較表の作成 を日毎にまとめて、この比較表を作成した。ここには、新たに得られた見聞書も加えたので、 いわゆる原本を求めるのではなく、あくまで一番内容豊富な茶会記事を見出すと 搏捜で得られた多数の史料のうちから主だったもの七種を選び、

らく前例を見ない研究であると自負している。 五、茶会点前の復元 点前の復元を行った。 以上の行程を経たのち、五つの茶会について、国立女性教育会館の茶室、 いわば体験的復元である。 その詳細は第二部に譲るが、

## 第二部 各論

# 一、宗湛日記の原本はいつ、どのようにしてできたか

この課題はまだ議論が進んでいないが、ここに私見を主とした試論を述べたい。

欠落箇所が全くない。そしてこの系統の写本が現存写本の大部分を占める。 た結果このようになったと考えたい。これに対し、史料編纂所本(神屋家本を明治に謄写) る。これから考えると、これら諸本の祖本は、天正十四年分だけの綴りであったが、何らかの理由 の本だけの写し落しではなく、同じ欠落箇所が他の二本にもあり、 茶道古典全集本の元となった劉家本には、天正十四年記事の末に長い欠落個所がある。 汚損を生じたのではなかろうか。それを各本の筆者が出来るだけ多く解読したいと努力し しかも欠落の範囲が微妙に異な

最初となって、順次新しい年代の分が成立したのではないか。 が先行したが、 汚染したので、その個所をあらためて復元した後者が出来、 史料編纂所本どちらが古い状態を示しているのだろうか。 劉家本系も、 常識的に考えれば、 天正十六年以後は目立っ それが本格的な原本の

た欠落個所がないから、 説にも一理あろう。 この新原本に従ったのであろう。以上から考えると、劉家本が古いという

双方が生じた。今日庵本は後者に属し、一番長い期間を通して収録した善本である。 だから、原本編集は、関ヶ原の戦いの後一頓挫し、暫くして次の編集作業が新たに始まったと見る べきだろう。この編集の中断は諸本にも影響を及ぼし、前者で止まるもの、後者まで伸びるもの、 神屋本は、慶長四年までで、以後史料編纂所本は慶長十八年分迄を山内家本の謄写で補っている。

するに宗湛は、携帯用帳面ばかりでなく、 記のそれと大きく異なる。しかし両者同文の箇所もある。さらに年次別配列に乱れもみられる。察 である。当研究会で実見したものが二本しかないのではっきりとは言えないが、見聞書の記述は日 しながら見聞書にまとめたと考えられる。なお、山内家本で日記に続けて見聞書の最初の部分があてるに気治し、技術の方式を見い、教会を記録し、されて大学問 宗湛日記三部作のうちの見聞書は、天正十四年から慶長十一年までの百三十回に近い茶会の記録 まとめて一巻とする計画であったことを示すのであろうか。 一枚紙のメモなども用いて茶会を記録し、それらを参照

このほか、続群書類従本に至る抄本の成立等、論ずべき点が多いが、 献立日記は詳しく論じられないが、見聞書とほぼ同じ時期の編集と考えて大過なかろう。 今は省略に従う。

ここで述べた見解は、 ほぼ大橋遅松が国会図書館本跋文で匂わせている。 改めて先人の慧眼に敬意 (伊藤延男) 最後に、

# 二、「宗湛日記」諸写本の来歴と日記の流布

写本一覧 (付表1)の中から、来歴を知る手がかりとして、数本に説明を加える。

がこの日記という。尤も、永島氏は、現存劉家本の書写年代を江戸末期と推定している。 るが、神屋家十一代宗安の女(元文元年没)が劉 (笠)文右衛門に嫁しており、その折持参したの 劉家本 永島福太郎氏の解題(『茶道古典全集』第六巻 淡交社 昭四十二年)にもあ

ており、 村又尓」の名は、遅松の著書(『尾州千家茶道之記』 安永三年)で確認でき、内容に信頼がおける。 も『延享分限帳』に「御茶湯」として載っている。同様に久田本に関連して挙げた「北村休二」、「北 文中の「筑前の長臣郡和泉」は、福岡藩の『享保分限帳』に家老として、また「茶道の長百野宗湖」 二十年)の解説に、尾張藩の御用商人で町人茶人とある。遅松は跋文で書写の由緒を記しているが、 A 7 A 2 神屋市左衛門 (十一代か)から借用し書写したとの奥書があるという。 三好重義本 『閲史筌蹄』(芳齋長野誠 全四三巻 福岡県立図書館蔵)の中で紹介され 国会本遅松 筆者の大橋遅松は、『森川如春庵の世界』展図録(名古屋市博物館

関連する記述を次の神屋本の中で紹介する。 A 8 長野誠本 『閲史筌蹄』の著者である長野(明治二十四年没)も写本を所持していた。

男で神屋分家を立てた正兵衛に始まる。分家の際も日記を持参したと推測する。 史料編纂所本神屋 史料編纂所は、 明治二十一年に神屋宗三所蔵の写本を謄写した。こ

宗三 (二十代) 提供の写本はA8長野本の写しであり、長野本は分家本の系統ということになる。 蔵としたと書いている。記述に従えば、謄写当時、本家には前述の三好借用の神屋本は既になく、 さて長野は、 神屋本家にはすでに日記はなく、当代の善四郎 (二十代か) は長野本を書写して家

岩永文禎の所蔵であったことがわかる。慶長五年の記事を含むことから、C2久田本との関連が考 えられる。実見した写本の中では最も古い書写である。 慶應本朝吹 朝吹英二の旧蔵本である。「玄昌堂図書」や「藿斎珍蔵」印から、以前は

書で献立日記は含まれていない。慶長二年から始まるが、 上中下三巻組の中巻に該当する。「長野蔵書」 福岡県立図書館本 外題には「神屋宗湛茶会献立日記三」とあるが、内容は日記と見聞 印から前述の長野本の中巻の可能性が高い A2国会本遅松の奥書を参考にすると、

稲垣休叟、 本である。 草間直方らの交流が確認出来るが、森川=森川竹窓との確証までは至っていない。 奥書にある「以森川氏之本書写校合了」の森川氏については、『蒹葭堂日記』で森川竹窓、 続群書類従収載宗湛日記の底本となった蒹葭堂本の書写で、和学講談所旧蔵

ングとは別に、おぼろげながら親となった写本の姿がみえてくる。 永島氏の言にあるように、異本と称するほど諸本の内容に変化はない。しかし内容の校合とは別 外題、特定の図など視点を変えて諸本を比較してみると、日記の記載期間でのグルーピ

の茶人たちの交流を通した「宗湛日記」の流布について考察を進めていきたい。 今後も、諸写本を精査し、より詳細な情報をくみ取ることで、写本の系統や、 大坂、尾張 (中村節子)

# 日毎文献比較と日記・見聞書の記述解析に基づく茶会復元の試

茶会は、 聞書に献立日記を加えた三種について茶会開催日の突合せを行い、異同をチェックした。 日毎文献比較作業後に、点前復元の試みのための基礎資料つくりを行なった。先ず、日記及び見 これら三種の記録が揃っていることを第一要件とした上で、 復元する

- 一、秀吉に近侍或いは当時著名な茶の湯者の会
- 2、 宗湛が複数回招かれている人物の会
- 3、茶室のサイズが明記されている会
- 天正十四年~天正十八年中の会(利休、宗及とも天正十九年に没していることを考慮)
- 5、見聞書の記述が詳しい会

めの活字見聞書を作成した。 た四本、天正十五年以降は国会本遅松との二本の日毎文献比較結果を記入し、茶会復元の試み に、福岡県立図書館本の見聞書のワープロ活字起しを行い、それに 天正十四年十二月二十九日ま での会については二種の活字本(茶道古典全集本と西日本文化協会本)及び写本国会本遅松を加え 以上五条件に全て適う会を列記した資料を作成。同資料に基づき抽出した会すべてについて日毎 の た

を作成、同時に活字見聞書の記述に基づき ついで抽出した会ごとに、日記及び活字見聞書の二資料から点前復元に必要な情報一覧 (付表3)

る推定作業を実施、 茶室プラン (本勝手・逆勝手、炉の位置、茶道口・貴人口、 ② 茶会進行手順書作成 床の位置、 道庫・棚等 ) に関す

これら諸資料を元に復元する茶会の絞込みを行なった。 その結果、

### 津田宗及

- 天正十四年十二月十九日朝会於堺(四畳半席)(本勝手、ヨシ棚付、上座一間床)
- 天正十五年三月九日朝会於堺(平三畳席)(本勝手、台目切り、籠付、下座床、竹縁付
- 草部屋道設 天正十八年十月廿四日朝寅刻会於大坂(二畳席)(本勝手、隅切、障子付道籠、床、外ノククリ)
- 天正十四年十二月廿一日朝会於堺 (深三畳半 (大目)席) (逆勝手、上座床、隅切、三重の小棚)、
- 天正十八年十月廿日昼会於京聚楽 (二畳席) (本勝手、隅切、道籠、床)

大日本茶道学会の点前を下地に、茶会復元の試みを実施、記録をとった (付図1参照)。 の五会を決定。国立女性教育会館内にある又隠写しの四畳半席と同館和室広間に仮設した茶席で、

室の広さと道具の取り合わせ、道庫の位置と利用法、当時の喫茶作法等を付記して、 と同様の作業を継続、必要な資料をつくり茶会復元を試み記録し、併せて各会ごとにその特徴、茶 れた茶会復元の試み」(仮称)として纏めたいと考えている。 今後の展望として、 今回復元を試みた茶会を除く見聞書中の残り百二十余の全茶会において今回 「宗湛の招か (小林紘子)

苦心されたのである。その試行錯誤は床や床飾り、道具を飾る諸棚の形状に影響する。日記には多 ことが出来る。 等が七十六件も登場する。その変遷の中に空間を減縮する作為、巧妙な空間計画の意図を読み取る 様な棚類、移動式の棚である台子や小棚、仕付けの吊棚、その中間的な存在と思えるヨシ棚や道籠(籠・篭) 合わせ方の齟齬となって表れた。貴重な諸道具を如何配置すれば使い易く、美しく見せられるかが へ移行する渦中にあったことである。茶室空間の減縮は、まず道具の選択としつらえ方、 茶会復元を試みる過程で再確認されたのは、 ョの咸縮は、まず道具の選択としつらえ方、道具の取宗湛日記に記述された茶会は広間から小間の数寄屋

貫等にその在所も取って代わられた。 も二十一件中約半数が台子から床周りへ移動し、残りの半数が小棚やヨシ棚や道籠へ位置を変えて 登場しており、 いった。この間に四方盆は取り除かれて、茶碗等と共に一時的に吊棚に在所を得るが、 の席で使われ、 し日記では、 広間の茶会では様々な唐物が飾られたが、茶碗の唐物にはもっぱら油滴天目が使われた。 棚類と共に登場する天目茶碗は二十件全てに油滴の記述はない。その内八件は秀吉 天目台の記述が半減したように次第に減少している。同様に、四方盆に据えた肩衝 台子と道籠に半々の割合で飾られた。またその大方は、天正二十年までの茶会に 引切や羽や しか

宗及席は、共に二畳席に床と道籠を備えており、道籠に配置された道具の数は台子と同じ程に増え は二枚障子を取って台子のように大目の先に置かれた。しかし、これらの棚に置かれた道具は至っ 天正十五年一月十一日朝、 するヨシ棚。同月廿一日朝の草部屋道設の深三畳半席では「勝手の内に一尺ほどの小棚」。そして 台子に在った茶道具の新たな移動先は、天正十四年十二月十九日朝、津田宗及の四畳半席に初出 完成した配置の形が見て取れる。 それに比べると、天正十八年十月廿日昼の聚楽の利休席と、同月廿四日朝の大坂の津田 大和郡山の羽柴美濃守の深三畳大目席に初出する道籠である。この道籠

名護屋城山里の四畳半座敷の四カ所に見られる。勝手に這い入れば、亭主は動くことなく客の息使この道籠を多用したのは秀吉で、大坂城山里丸の二畳席と四畳半の数寄屋、京都聚楽第の二畳席、 いを間直に感じて茶が点てられる。空間の減縮で身体距離を縮め、心的圧力を加えつつ心の動きを その老練さこそが老人用の棚と言われた所以であろう。 亭主は動くことなく客の息使 (財満やえ子)

## 五、宗湛日記に見る建築計画的試論

二十八と突出している。 畳半・大目が五十、二畳及び二畳半が二十二である。 宗湛日記に登場する天正年間(文禄元年を含む)の茶室の大きさは、 三畳及び三畳半・大目の中でも、 四畳半が十三、三畳及び三

ど、美しさと機能的なことを当時の茶人たちは各々自由に考えながら追求したのではないだろうか。 亭主と主客が同室にいることが茶の湯の始まりとすると、主客の位置関係や距離感、道具の位置な めていく手法がある。日記や見聞書の記述から、道具は、大きさだけでなく、どう見えるかを考え、 の過程にある。統一が進み、安定するにつれて、茶室の大きさなどさらに変化していく様子が窺え まだ社会が安定していない中で、名馬を繋ぎたる藁屋を追及しているこれらの茶室の表現は、 三畳は、山上宗二記によると、道具のない詫数奇の茶室として以前からあった。四畳半が流行り、 出現する。 日記の天正十四年から十五年二月までに「押入」が五ヶ所ある。「押板」は、慶長二年までに七ヶ 建築計画に、道具や人などが占める単位空間と所作による動作空間を組み合わせて室空間を決 自然な動きに基づいていることが分かる。どちらも、主客から見た美しさを追求している。 押入を床とした茶とは何か。 押板の脇に茶道具を飾る棚がそれ以前に見られる。 変化

十二月二十四日の会では「床ナシ」と「押入ノ心ニ切畳半アリ」が並記されている。押入の使われ辞書によると、当時の押入は「家の壁の外側へ突き出た所の内側にある空所」である。天正十四年 点前席と同じ意味に使われている。 当時の勝手には「茶の湯の道具や貴重な工芸品を収めておく場所」の意がある。台所の意はまだない。 方は現代のそれとは異なるようである。また、「勝手」が日記に十二ヶ所ある。日葡辞書によると、

意識の変化が読み取れるかもしれない。見聞記から多くの知見が得られる。日別内容一覧表に比較集あるいは写された時代の影響を受けているが、用語の変遷は使われ方に関係する。部屋に対する した写本、見聞記、献立日記の情報をどう反映させるとどう使い易くなるのかが、今後の課題である。 日別内容一覧表で検索して、日毎比較で内容を検討すると、建築用語の変遷がわかる。写本の編 (有里公徳)

7

#### 付表1

#### 宗湛日記写本一覧

- 1) 本一覧には、当研究会の調査で得た写本情報に、先行研究で紹介されている写本を加えた。
- 2) 名称は、便宜上、外題・内題ではなく、所蔵者名(複数所蔵の場合は、旧所蔵者あるいは筆者、印章などを付記)で表記した。
- 3) 各写本は、E 群を除き、日記に書かれた茶会記期間(未見史料については推定)別にまとめた。
- 4) 全史料には、実見は○(そのうち校合に使用したものには◎)と、未見は★の印を付記した。なお未見史料の所在確認は未着手。
- 5) 未見史料については推定した箇所を[]で括った。

#### A群 天正 14年10月~慶長18年12月9日(慶長5年欠 ただし献立には有)

No.	略称	書写年代	筆者	主な印章/用箋	日記	献立	見聞書	序跋奥 書	公刊
A-1	劉家本◎				写本	有	有		影印(注1) /活 字(注2)
A-2	国会本遅松◎	1766(明和3)	大橋遅松		写本	有	有	有	
A-3	今日庵本○	1777(安永6)			写本	有	なし	有	
A-4	国会本二休〇			二休茶室/用箋草々庵	写本	有	なし		
A-5	森川如春庵本★	1766(明和3)	大橋遅松		写本			[有]	
A-6	京大本〇	1922(大正12)			写本	なし	有		
A-7	三好重義本★	1716(正徳6)			写本			[有]	
A-8	長野誠本★				写本				

#### B群 天正 14 年 10 月~慶長 4 年閏 3 月 25 日

B-1	史料編纂所本_神屋◎	1881(明治21)			謄写本	なし	なし	有	
B-2	慶應本箒庵〇	1857(安政4)	西宮以文	<b>箒庵文庫/桜戸文庫</b>	写本	なし	なし	有	
B-3	神屋家本★				写本				
B-4	平岡浩太郎本★				写本	なし	なし		活字(注3)
B-5	国会本忠篤〇	1839(天保10)	水野忠篤	松平直亮図書/槙樹庵蔵	写本	なし	なし	有	
B-6	大分県立図書館本〇				写本	なし	なし	有	
В-7	九大本広瀬〇			広瀬文庫/江藤文庫	写本				
B-8	静嘉堂本○				写本	なし	なし		
B-9	筑紫頼定本★		松永一豊		写本				

#### C群 天正14年10月~慶長5年

C-1	慶應本朝吹(4月2日のみ)◎	1690(元禄3)	安楽軒日休	玄昌堂図書記/藿斎珍蔵	写本	なし	なし	有	
C-2	久田本★				写本				

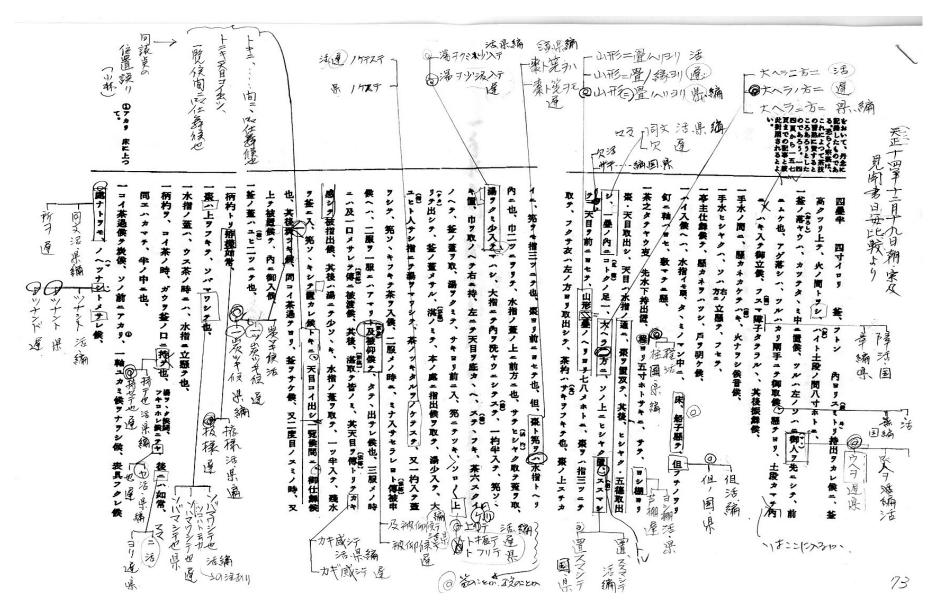
#### D群 天正 14 年 10 月~天正 20 年 4 月 14 日

D-1	書陵部本◎	1811(文化8)		和学講談所	写本	なし	なし	有	活字(注4)
D-2	東博本〇	1825(文政8)	茶仙堂	茶仙堂/徳川宗敬氏寄贈	写本	なし	なし	有	
D-3	史料編纂所本続群書類従○	1885 (明治25)			謄写本	なし	なし	有	
D-4	公文書館本〇				写本	なし	なし	有	
D-5	九大本檜垣〇				写本	なし	なし		
D-6	稲垣休叟本★				写本				
D-7	草間直方本★				写本				
D-8	森川本★				写本				
D-9	蒹葭堂本★				写本				

#### E群 その他

E-1	福岡県立図書館本 (慶長2年1月9日~慶長18 年12月9日(慶長5年欠)) ◎		長野蔵書	写本	なし	有		
E-2	史料編纂所本_山内 (慶長6年10月9日~慶長 18年12月9日) ◎	1918(大正8)		謄写本	有	有	有	活字(注2)(注 3)
E-3	山内家本★			写本				
E-4	武居本★			写本				
E-5	許斐友次郎本★			写本				
E-6	黒田家本★			写本				
E-7	奥村武本★	1851(嘉永4)		写本				

- 注1)『宗湛茶湯日記』西日本文化協会 1984
- 注2)『宗湛日記』茶道古典全集第6巻 淡交社 1962
- 注3)『博多宗湛日記』再版 審美書院 1921
- 注4) 『神谷宗湛筆記』 続群書類従第19輯下再版 続群書類従完成会 1925

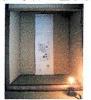


#### 付表3 茶室プラン及び点前手順解析のための草部屋道設御会に関する日記・見聞書からの情報一覧

黒太字:日記・見聞書に共通 黒細字:日記にしかない情報 斜体太字:見聞書のみの情報 ( )内斜体細字:筆者注 天正14年12月21日朝 天正15年2月9日朝 天正15年3月12日朝 *丙戌12月*21日朝 **2月**9日朝 日時 12日朝 堺 地域 亭主 クサヒヤ道設 道設 クサヒ屋**道設** 客 宗湛*(一)* 塩屋宗悦、宗湛 宗及老、水野賢物殿、宗湛 …及、賢物、湛 フカ三テウ フカ三テウ半 フカ三テウ大目 フカ三テウ半 (肩衝拝見後) 亭主肩衝・盆上げる 床二 土花生 丸薄板 床前二 茶巾洗二白玉/白梅·小刀 井ロリ キロリ 風炉 *(風呂)* 前二土器立 茶室 小棚 カツテニ小棚 小棚下二水指…座敷二持出 カッテ内ニ1尺ホトノ小棚アリ 下二土水指·真蓋·*始ヨリ* 始ヨリ木色ノ箱アリ 小棚 中ノ重ニ 憂マへ 碗サキ メンツウ斗持出、其外道具ミナ小棚ニアリ 棚ノ上二台天目・道具仕入テ 小棚 ヒシヤク 上二 隨子 茶道口 手水 **手水柄杓** 手水柄杓 手水柄杓 古釜 古釜 ノカツキ・**貫・ツル** 自在竹·弦 自在 コイ茶 肩衝·袋·四方盆 棗・袋 (棚)(薄茶の時 木色の箱に又入テ) 濃茶 棗 茶入 ウス茶 嚢 (内ヨリハコヒ) 豪(棚の木色の箱より取り出す) 薄茶 中次持出 土水指(小棚下ヨリ濃茶ノ時持出、薄茶ノ時は取出しメンツ 土水指・真蓋…小棚下(上記) 土水指(小棚下二) ウノ前二) セト茶碗・道具仕入テ(小棚ヨリ) ヤキ茶碗(道具入テ) 茶碗 コイ茶 天目・道具仕入テ、台古黒 ウス茶 セト茶碗(ヤキ碗 内ヨリハコヒ) 道具 茶杓・始ハ水指上 フキテ棗二置 土 メンツウ(内ヨリ特出) メンツウ*(持出)* メンツウ 水下 引切 養置 引切(内3リ特出) 引切(小棚より) <u>(柄杓) (小棚ヨリ)</u> ヒシヤク 柄杓 |ヒシヤク(内ヨリ特出) 台ノ通 水下ノソハニ 炭斗篭 水指ノ上ニ ウス茶ノ時…ネチテ水指ノ上ニ ホウロク 灰・尺子ノヘラ(内ヨリ) コウノ水 大貝・香若草(内ヨリ) …ツルヲハ 釜ノソバ上ヲ我方ニ被置候 メンツウ斗持出候 其外道具ミナ小棚ヨリ取落候也 小棚二ハ 中ノ重ニ 豪マエ 碗サキ ヒシヤク上ニ置也 引切・ヒシヤク右方に如常ヲキ 始ヨリ小棚二木色ノ箱有 是ヲ取落シ中ノ棗被出 始ノ棗ヲ マステ 太ノ処ニ置 (茶杓ヲフキ)盆/フチ右ノ下前ニ持セテ被置 水指蓋ヲ取 棚二立懸テ 表記 肩衝之事…緒ヲトキ、左ニマワシ房サキ右ニナル 肩衝の蓋ヲハ 盆トフチト中角ノ上ニ 右ノワキニソトヨセテ也 (亭主茶入・盆を床に上げる時)盆ヲ床ノ下カツテノ方ニ スミヲカヘニ置 右ニテ(左ヲソヘテ)床ニアケラルル

#### 点前復元写真

天正14年12月19日朝 津田宗及 四畳半席



船子の絵(左絵)



天正14年12月21日朝



後座道具畳と籠



天正18年10月20日昼

炉脇に茶器と茶筅



天正18年10月24日朝寅刻

炉中央より高く文琳・四方盆



柄杓を点前畳内に引く



炭点前



籠は後ろ向きで所作



水指は道籠に置いたまま扱う



道籠に障子有



各服点の亭主相伴



台天目茶が出る





道籠の障子は開け閉めて扱い



点前終了時の籠内



肩衝四方盆の載せ拝見に出す





座掃き



水指は道籠に置いたまま扱う



文琳を盆から下し拝見に出す



拝見後肩衝盆に載せ床に上げる